

# 幼児教育における米作りの意義 (実践報告)

明星大学教育学部教育学科 非常勤講師 藤田 久美子

## Significance of rice making in early childhood education. (Practical report)

Meisei University School of Education Kumiko Fujita

キーワード：幼児教育 稲作 年長

### はじめに

2018年に施行された幼稚園教育要領では、「環境」の内容に、「自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く」「身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする」と、取り上げられている<sup>1)</sup>。幼稚園において、様々な植物を栽培することによってこれらの目標を達成しようとする実践がある。米作りは、年間を通して里山の自然に丸ごとかわり、そこに息づくものや生産と自然を支える人たちの営みに気付く活動である。幼児教育における米作りの意義を明らかにしたい。

### 田んぼの米作りを通して里山の自然と暮らしに気づく

この園は八王子の新興住宅地の新しい幼稚園として出発した。住宅地とはいっても周囲は多摩の中山間地(ちゅうさんかんち)。里山に囲まれた自然豊かな地なので地域の自然を保育に取り入れたいと考えていた。日常的に散歩に出かけて生き物や植物に触れていたが、実際に食べ物を育てる中で自然と人間のかかわりを学ばせたいと、米作りを考えた。田んぼを貸してくださる方を紹介してもらい、里山農業クラブと出会った。里山農業クラブは農業後継者のいなくなった休耕田を借りて、里山を守るために農業を進めている組織である。クラブは幼稚園の子どもたちが米作りをしたいという願いを快く受け入れてくださり、田んぼ1枚を預けてくれた。

クラブは里山保全と自然農業の再生、農業の大切さを子どもたちに伝えたいという方針を持っていた。「米1粒作る大変さを体験している人と、米なんかお金を出して買えばいいと考える人とはものごとを考える幅が違ってくる」というクラブの塩谷暢生さん、丸山秀義さんの言葉に共感して実践をスタートさせた。

### 米作りと子どもたち

#### ・ぼく泳いじゃった(代かき)

年長になった子どもたちは4月に田んぼにレンゲつみに出かける。年中の時の9月に撒いたレンゲの種が田んぼ一面に育って花を咲かせていた。

「ぼく泳いじゃった」年長の子ども年代かき作業でのつぶやきである。代かきは田植えの前に行う作業である。田起こしで土を掘り起こして、空気を土の中に送り込んだ田んぼに水を入れ、水と土をなじませるものである。ふだんでも砂場遊びは大人気で、子どもたちは砂の山やトンネルの



代かき

ほかに、溝を掘り、水を流し込んで川やダムを作るのを楽しむ。田んぼの代かきは砂場遊びとはずいぶん違って頭のとっぺんからつま先まで泥まみれになる。「冷たい!」「ぬるぬるしている」と、はじめは抵抗があった子も、友だちの楽しそうな姿を見て、誘われてドキドキしながら泥の中に入る。田んぼの泥は粒子が細かいので、子どもにとって気持ちがいいものである。最後は、柄振(えぶり)と呼ばれるならし棒を使って平らにならす。泥に足をとられるので結構重労働である。

・赤い印にあわせるんだね(田植え)

コメ作りは、昔ながらの手植えである。機械を使わないところに意味がある。子どもたちは、横一列に並んで綱についた印に合わせて等間隔に苗を植えていく。3本の苗を束にして根っこ近くを持ってグッとさしこむように植えていく。浅からず深からず。そのあんばいが難しいのである。代かきのときとうってかわって子どもたちの表情は真剣である。静かに淡々と作業をしていた。一度覚えたら、そのあとは同じリズムの繰り返しの心地よさを楽しんでいた。田植えの後の田んぼを眺めると自分たちの仕事の成果が一目で確かめられるのである。



田植え

・どじょうだ〜自然とあそぶ〜

作業が終われば、田んぼのまわりで自由にあそぶのである。里山の田んぼは薬を使っていないので、おたまじゃくし、かえる、どじょう、ザリガニなどたくさんの生き物に出会える。子どもたちは生き物を捕まえて遊ぶ。里山クラブのおじさんから、「捕まえてもいいけど持ち帰らないで」と自然環境を守ることを具体的に教えてもらうのである。

・おコメだいじょうぶかな

田んぼに張られた水を目にしていた子どもたち。雨が降らず、田んぼに水がほとんど入らない年もあった。このまま雨が降らなければ、大切な稲が枯れてしまう。晴れの日が続くと、「おコメだいじょうぶかな」「枯れていないかな」とつぶやく子どもたち。雨が降るようと、てるてるぼうずを、さかさにしてつるす姿もあった。米作りをしているからこそ、雨と稲の成長をつなげて考えることができたのである。

・えびみたい(かかし立て イナゴとり)

秋になると大切な稲を守るために自分たちでかかしを作って立てる。かかしは実った稲の穂を狙う鳥よけである。イナゴもたくさんいる。里山の生き物は、生態系を守るために持ち帰ってはいけないことになっているが、稲を食べてしまうイナゴをとることは許されている。イナゴはピョンピョンと稲の葉先を飛んで逃げ回り、なかなか捕まえるのが難しい。日本では昔から農家にとって貴重な動物性たんぱく質として食されてきている。捕まえたイナゴを一日箱の中に置いて糞をだしきり、子どもたちの前で熱湯をかけ、油で揚げたり、佃煮にして命をいただく。「えびみたい」「おいしい」と、イナゴの足を1本、1本確かめながら食べる子もいた。ふだんは昆虫を食べることはほとんど無い子どもにとって、稲作の文化を体で学ぶ貴重な体験になっているのである。



かかし立て

### ・ザクッザクッ（稲刈り）

待ちに待った収穫は大忙しだ。稲刈りも手作業で行う。大人が使うのと同じのこぎり鎌を使って稲を刈る。ざっくり刈り取る感触は心地のよい体験である。子どもたちは、稲の株を片手でつかんで、その株の根元を鎌で刈り取る。株を稲わらで縛るのは大人である。大人はおじさんたちから縛る方法を教わる。稲の束を稲わらという同じ材質のもので縛ることによって稲が乾燥した時にも緩むことがないのである。

束ねた稲は、竹で組んだ馬に掛けて、約1か月間天日干しにする。

一般的に刈り取った稲はその場で脱穀し、ガスを使った乾燥機で一挙に乾燥する。しかし、昔ながらの天日干しは穂に茎がついたままで茎を通してもみの中の水分をゆっくり外に出すのでおいしさは格別である。子どもたちにはその意味を理解することは難しいが、里山農業クラブのおじさんたちからおいしいお米を作るために干していると教えてもらうのである。

### ・お米ができた（もみすり）

子どもたちはすり鉢とすりこ木や軟式野球のボールを使って、もみ殻を取り除き、玄米にする。何度も何度もすりこ木ですって、やっと1粒、1粒のおコメ（玄米）が顔を見せてくれる。できた玄米を一升瓶に詰めて木の棒について精米にする。

もみすり作業や精米作業を体験させることで稲穂から白米にどのようにたどり着くのかを体を通して学ぶのである。

### ・おいしいね～収穫祭～

育てたお米を全園児でいただく。お世話になった里山農業クラブの方たちもお招きする。年長の子もたちが荒馬踊りを披露する。

年長クラスのお母さん方が、かまどでご飯を炊いて、具だくさんの味噌汁を作ってくれる。年中のペアの子どもたちに米作りで楽しかったことなどを伝えながらいただくのである。

「自分で作ったお米は、やっぱりおいしい」とおかわりして食べる子どもたちである。

### 田んぼ日記を描く

田んぼに出かけたときは必ず田んぼ日記を描く。小さい紙に色鉛筆やサインペンで絵を描いてまとめる。子どもたちは苗の成長と変化を細かく観察していることがわかるのである。また、自分が実際に道具に触りながら体験したことで、一人ひとりの思いや動きのある絵になるのである。子どもたちは最後に里山農業クラブのおじさんたちにお礼の絵手紙を描く。



はさがけ



荒馬踊り



稲刈り

## おわりに

2005年7月に食育基本法が施行され、学校教育、幼児教育でも栽培活動などの食育が取り組まれてきている。この園での米作りの意義は、次のようにまとめられる。

### 1 幼児は年間を通して里山という自然を丸ごと体験する

米作り活動では、四季を通じて同じ田んぼに通うことで里山という自然を丸ごと体験できる。稲刈りを終えた田んぼにレンゲの種をまき、春先にそのレンゲを摘みながら芽吹いてくるいろいろな植物や活発に動き回るようになる昆虫に気づく。水を入れた田んぼの表情は大きく変わる。泥の中の生き物を見つけて、こんなに生き物がいたんだと驚く。泥のにおい、草のにおいにも気づく。田んぼの中に入って雑草をとると、稲のにおいが鼻先までやってくる。イナゴを捕まえるために秋の田んぼに入る時には、水は抜いてあるが、ところどころ足を取られそうになるぬかるみもある。稲を刈りとったあとの田んぼはすっかり姿が変わるのである。このように田んぼを中心とした四季折々の里山の姿を体験することは、自然の移り変わりや変化を感じる貴重な体験となる。このことは幼稚園教育要領(平成29年告示)人間関係の項目において「自然や身近な動植物に親しむことなどを通して豊かな心情が育つようにすること」<sup>2)</sup>にかかわることである。

亀山秀郎(2012)によると幼児の不快感を伴った体験をきっかけとして、より一層興味関心をもって稲作に取り組むことの意味を論じている<sup>3)</sup>。著者も、不快だから子どもにそういう体験をさせないと考えるのではなく、どう感じたかが意味のあることであって、そこから自分の感覚、感情に気づくことが大事であると考え。また、子どもは米作りという目的を意識することで不快な感覚を避けるのではなく、受け入れるという側面があると考えられる。

### 2 生産と自然を支える地域の人たちの営みに気づく

子どもたちは普段の生活の中で接する大人は親や祖父母、保育者などで、地域の大人はほとんど含まれない。幼児の社会認識は自分を中心として形成されるが、自分と関わる大人の広がりあまり見られない。そこには親や園や学校も日常の課題に追われ、地域との結びつきを広げられないでいる現状があるからであろう。

一方で園や学校の周りには地域を豊かにしようと活動している大人たちの営みがある。そうした大人たちに意識的に出会わせることで子どもにさまざまな大人たちの願いや生き方に触れさせることができる。里山クラブとの出会いは次の4項目にまとめられる。①地域の「おっちゃん、おばちゃん」が子どもをかわいがり、時には叱るという触れ合いになる。そうした接し方の多くは保育者や親の接し方とは異なって、子どもの行為そのものに対する評価に基づくものである。②地域の自然を守り、豊かな未来を作ろうという目的をもった大人たちと出会う。③地域の豊かな文化を継承する大人たちと出会う。④地域には解決しなければならない課題がある。その課題に向き合う大人たちと出会う。また、幼稚園教育要領(前出)環境 2. 内容 (6)においては「日常生活における様々な文化や伝統に親しむ」<sup>4)</sup>の項目に示されていることである。

### 3 米作りの体験が、食べ物を大事にするという気持ちを育てている。

お米ができるまでの体験を通して、その過程に労働があることを実感した子どもたちには、食べられる分だけよそう、残さず食べる、食べ物を大事にするという気持ちが育ってくる。

浦川麻緒里・吉武久美子(2010)によると、幼児のバケツ稲作り体験後の保護者への質問紙調査において、幼児がバケツ稲作体験後に食事に関するお手伝い行動の増加や食べ物の大切さの理解が深まるなど、米作り体験が米以外の食に関する側面に影響を与えたと述べている<sup>5)</sup>。本物の田んぼを借りることができなくても、バケツやペットボトルなどを使って幼児の生活に近い場所で稲作を体験することの意味は大きい。

著者も、幼児にとって長い時間手間ひまをかけて育て、稲の生長を感じる。そしてやっと米としていただけるという実感を伴った米作り体験は食べ物を大事にするという気持ちを育てていると考える。

#### 4 親たちが、子どもと一緒に体験し、学ぶ

この幼稚園の親たちの多くはニュータウンの住民で都心に勤務している労働者である。八王子に地縁血縁がある家庭は少なく他地域から移り住んでいるため、地域につながりはない。子どもを幼稚園に通わせることで初めて地域とのつながりができた方も多い。また、1980年代以降に生まれた世代の親たちにとっては初めて農作業体験である。その意味で我が子と一緒に初めてドロドロの代掻きや田んぼの虫と出会うことになる。親たちの「子どもたちより楽しんでいたかもしれません。米作りは初めてで、土をいじることすらふだん機会がないので、とても浄化された感覚です。ドジョウやザリガニが生息する水に触れ、子どもの頃に野山を駆け回った記憶が一気によみがえりました。繊細な感覚を持つ子どもたちには、とても必要な経験で改めて貴重な体験をさせてもらっているなと感じました。小さな身体で一生懸命、クワをふりおろす子どもたちの姿はとてもたくましかったです。大人になった時こうした経験を思い出してくれたらうれしいなと思いました。収穫が楽しみです」などの言葉からも土や自然との出会いがいかに新鮮だったかわかる。親自身が米作りから多くのことを学んでいたのである。そして、米作りの作業一つ一つの文化的な意味をかみしめながら体験を重ねることは単なる栽培体験にとどまらず、日本の米作り文化、食文化にまで関心を広げることにつながる。里山クラブメンバーの高齢化により、クラブの活動を親たちが引き継ぐ動きが始まり、自然を守り、未来に残す意義を感じ始めている親たちが生まれている。

#### 5 自然を守ろうとする地域の人たちの励みになる

地域の方にとっても園との結びつきから得るものがある。次の言葉は、里山農業クラブの塩谷さん、丸山さんからである。「田植えだけ、稲刈りだけ、というのではなく、1年を通じてコメ作りの最初から最後までをやり抜くというのは、非常にいい経験をしていると思います。田んぼには土があって、川があって、いろいろな生き物がいて、子どもたちが遊ぶには、格好の場所なんです。来るたびに、出会う虫も花も違ってくる。それこそが本当の意味で、自然に触れるということだと思っています。子どもたちも生き生きして遊んでいます。…中略…私たちの基本的な考え方は、小さな危険を体験させること。田んぼに入るときは素足ですし、稲刈りで鎌を使うとき、軍手はせずに素手でやってもらいます。そのほうが、実は安全なんです。軍手をしてはいけないとは言いませんが、自然の中に来るのですから、ありのままの自然の空気や土を肌で体験して欲しいんです。そしてそれをできるだけ小さいうちに体験してほしいというのが我々の願いです。」このように、クラブの方のお話を聞けば、幼稚園の取り組みに熱い期待が寄せられていることが分かるのである。園主催の夏祭りでクラブのおじさんたちが育てた野菜を販売していただき、園の子どもや親たちとの触れ合いの場になっている。里山農業クラブの方々も高齢化がすすみ、活動を維持することの難しさもある。園では保護者に呼びかけ、「田んぼの学校応援隊」を作り、クラブの活動を支えようとしている。子どもが地域で育てられるということは、そこに暮らす親たちが地域を育てる一員になっていくということにつながっているのである。

里山クラブにとって、地域の幼稚園の子ども、親、保育者に会うことは単に「後継者」を確保したということだけにとどまらない。クラブにとって幼稚園とつながりを作ることがクラブの活動の認知と評価を広げることになり、自分たちの活動の意義を再確認することになる。幼稚園に子どもを通わせる期間は長くても3年で、在園の親たちは変わっていく。それでも米作りを通して里山の自然の魅力を感じた親たちは子どもが卒園しても何らかの関りを持ち続けようとしている。クラブとしては里山の魅力という種を幼稚園にまき、その種が地域に広がっていくことを意味する。

## 6 保育者自身が試される活動である

自然を相手にしている活動は、何かあれば、急に田んぼに出かけて対応しなければならないこともある。年長の活動予定も変わることも少なくない。ダイナミックな自然活動が持つすばらしさと厳しさを楽しんで続けていくことができるのか、保育者自身が試されるのである。

子どもたちを取り巻く、保育者、親。里山農業クラブや地域のおおぜいの「ひと」たち。自然の中に息づく無数の命ある「もの」や野菜、米などの生産された「もの」との遊びやしごとという営み＝「こと」を通してじっくりと触れ合うことによって、自然に根づいた地域の文化という「こと」を学び、身に着けていく子ども・親・保育者たち。

園や学校を取り巻く環境、地域や保護者との連携など、諸条件がそろわないと、こうしたダイナミックな実践を展開することは難しいかもしれない。けれども一歩外に足を踏み出してみれば、都会の片隅にも自然は息づき、町全体に自然をよみがえらせ、地産地消の安心安全な食材づくりに努力している心ある人たちがいる。プランターからビオトープへ、そして町の中へと子どもたちとの活動を通じてその芽を広げていくことも可能である。

\* 学校法人 金子学園 柚木武蔵野幼稚園の実践より

東京都八王子市上柚木3-8 <http://www.y-musashino.jp/>

### 引用文献

- (1) 文部科学省(2017) 幼稚園教育要領, 24
- (2) 文部科学省(2017) 幼稚園教育要領, 24
- (3) 亀山秀郎(2012) 幼稚園における稲作の意義の検討-KJ法による保育者記録の分析を通して-「保育学研究」, 第50巻第3号.
- (4) 文部科学省(2017) 幼稚園教育要領, 25
- (5) 浦川麻緒里・吉武久美子(2010) 幼児期の食育推進のための実践的活動に関する研究-幼児期年長児を対象にしたバケツ稲づくりの効果-児童教育支援センター年報, 第5号, 8

### 参考文献

食育基本法(2007) 2015年改正

中山智晴・西方浩一(2009) 「文京・食農教育ファーム」, 実践活動の試みと参加児童への影響, 文京学院大学人間学部研究紀要vol.11.